

錢五と
よばれた男
森下 研





福音館日曜日文庫

銭五とよばれた男

森下 研 著

南村喬之 画

福音館書店

著者紹介

森下 研（もりした・けん） 北九州市門司区に生まれ、九州大学を卒業。現在まで放送作家としてTV・ラジオの脚本執筆のかたわら、ユニークな著作活動をつづけている。児童文学に『小さな大酋長』『男たちの海』（福音館書店）、『ゆきあたりばったり南太平洋』（徳間書店）『南の恋人たち』パラダイス・ポリネシア（潮文社）などの著書もある。今夏はザックを背に一人中央アジアをぶらぶら、久しぶりの旅を満喫したという。

南村 喬之（みなみむら・たかし） 一九一九年福島に生まれる。第二次大戦中は砲兵軍曹、敗戦後シベリアに三年間抑留生活を送る。その間も独学で絵を描きつづけた。画家としてのスタートは五三年。以来さし絵の分野に独特の作風をきざく（創元新社・ジュール・ベルヌ全集、朝日ソノラマ社・恐竜百科図鑑など）。軍曹時代は銃剣術大会特賞、画家仲間ではホームラン王、民謡の踊りは師匠級の大人である。



福音館日曜日文庫

銭五とよばれた男

一九七六年十一月二十日初版発行

著者 森下 研

発行 福音館書店

東京都千代田区三崎町一丁目

一番九号 郵便番号一〇一

電話（〇三三）二九二一三四〇一（代）

振替口座番号東京一一七六四五

本文印刷 明和印刷

表紙印刷 錦印刷

製本 積信堂

NDC 289/四六四ページ/一九センチ

乱丁落丁はお取替えいたします

©1976 Morisita Ken

目 次



一章	禁 ^{きん} じられた海	3
二章	長い旅のはじまり	58
三章	誘 ^{さそ} うもの阻 ^{はば} むもの	119
四章	ひらかれた道	181
五章	飢 ^き 饑 ^{きん} を食 ^く う	243
六章	かげのある栄 ^{えい} 光 ^{こう}	289
七章	夢 ^{ゆめ} を今ひとたび	337
八章	夜明け前の闇 ^{ぐみ} で	389
あとがき		450

銭五とよばれた男

一章

禁じられた海

一

旧曆きゆうれきの八月も末になれば、加賀かがの海はすっかり秋だ。くつきり晴れあがった空の下、見はるかす真昼まひるの海は、風こそ強かったが青く穏おだやかだった。きらめきながら、あとからあとから渚なぎさによせるうねりの彼方かなた、遠い西には、日の落ちるところ、すこし丸味まるみをおびた水平線がある。だが今、むくむく湧わきたつ雲を背せに、白帆しろほをひとつ浮かべた空と海の境さかいは、まばゆい光にあふれ、見るものの心を誘さそうようにはてしなくひろがっている。

天明六年（一七八六）八月二十六日の昼すぎ、官腰（金沢市金石町）に近い砂丘の下に立ち、海へ目をこらす少年がいた。体はやせて小柄だが、前髪だちの浅黒い顔はふくらして、瞳がいきいきと輝いている。錢屋の長男で、今年十四歳になる茂助だ。錢屋は、官腰で質屋と醬油醸造業をささやかに営んでいる。茂助は、一里ほど東の大野川上流まで醬油を配達にいった帰り、ふと沖の白帆を見つけてここへきたのだ。胸をふくらませ潮の香りを大きく吸った茂助は、手にした空樽を置くと、

「いま時分、こんなところにいるのを弟たちに見つかったら、また、海きちが いいわれるやろうな」

そうつぶやいてくすりと笑うと、ともすれば海風にめくれる裾を押さえてあたりを見まわした。ここから町は砂丘にかくれて見えず、渚にも、もう水が冷たいせいか子どもたちも遊んでいない。茂助は、安心して目をもどした。

広びろとした静かな海を見るたびに、茂助は、世界はマリのようになっていくという話を思い出して、いつも不思議な気持ちになる。そのことは、幼いころ父に聞いたのだ。

世界がマリの形なら、なぜ海の水が流れ落ちないか。裏側はどうなっているのか……。父はむつかしい理屈はわからんと、笑って教えてくれなかった。でも、こうしてゆるく曲がった水平線を見ていると、世界の丸いことは信じられる気がする。それに船が水平線に現われるとき、白帆

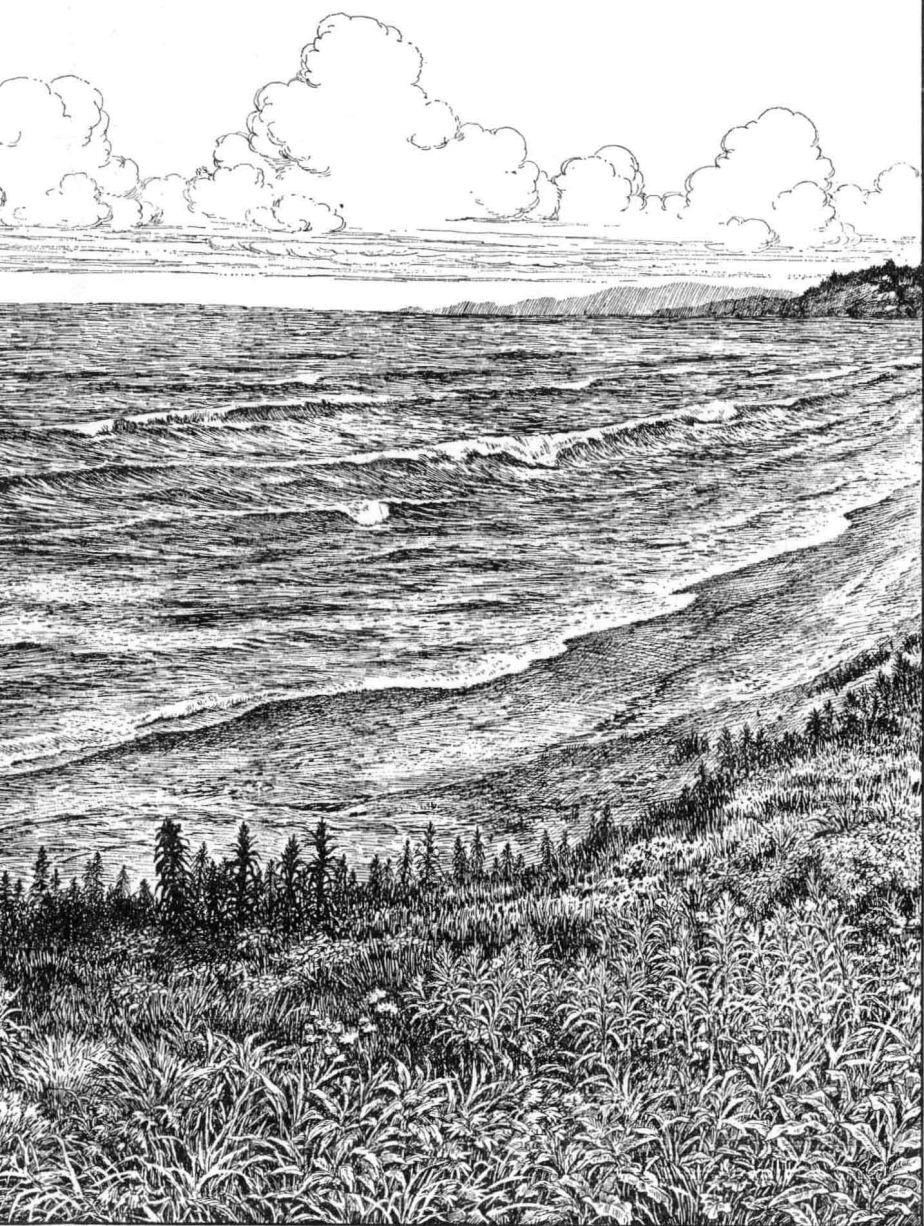
は波の下から湧き出してくるのだ、まるで海という丘をのぼってきたみたいに。

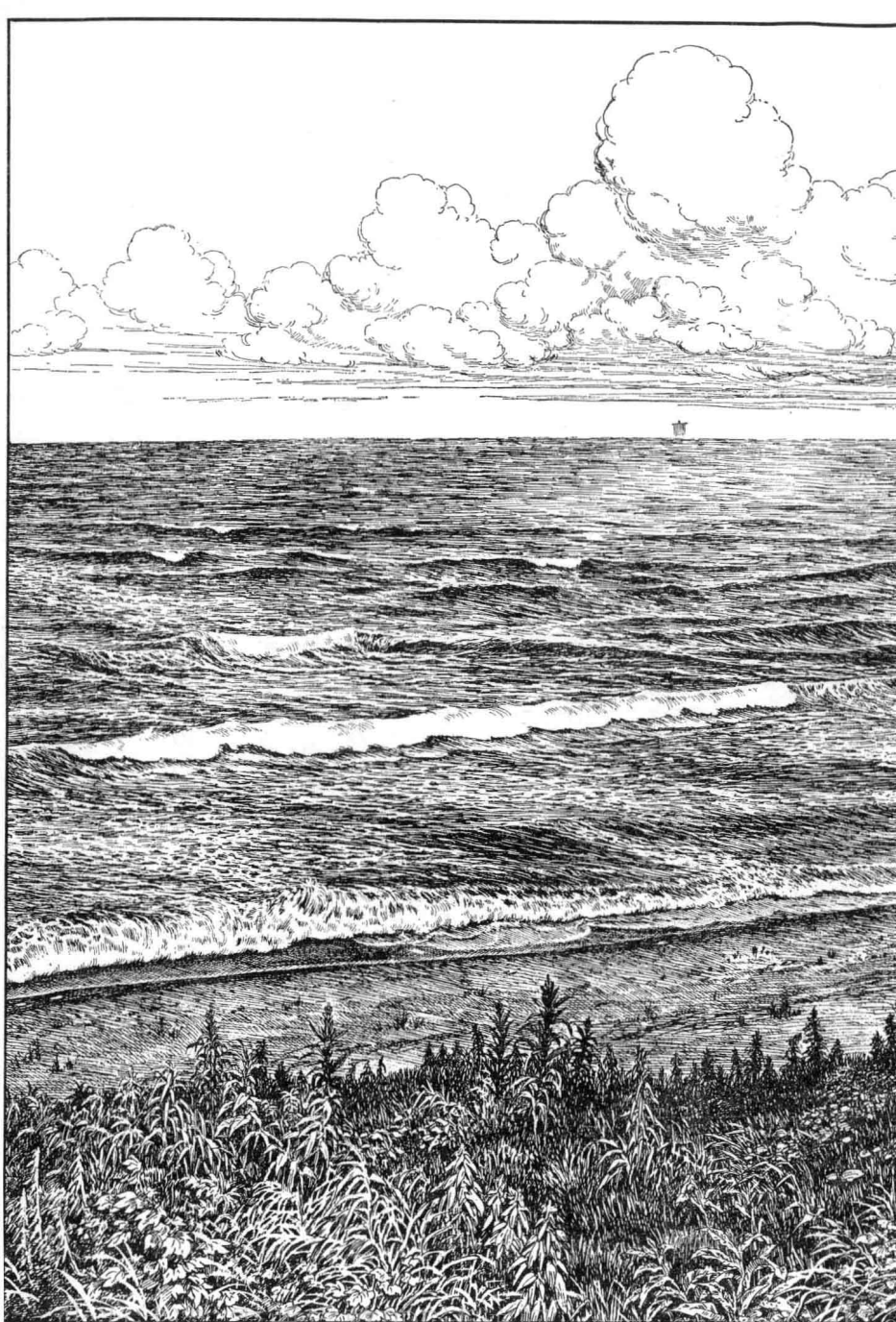
風をいっぱいはらんだ沖の帆は、ほとんど静止しているかと思えたが、先ほどにくらべれば、はつきり西へ動いているのがわかる。

あれは、バイ船だろうか。バイ船なら、秋のはじめの今ごろは、とうに瀬戸内へはいっているはずだというけれど、ずいぶん遅い。そういえば今年は、去年にくらべて商い船が多かった。飢饉が終わったせいだろうか……。茂助は、ゆっくり空樽に腰をおろした。

バイ船とは、加賀や北陸地方の商い船のことである。瀬戸内や大坂（大阪）あたりでは、北前船と呼ばれている。さまざまな物産を積んで、春は日本海を北へ奥州、蝦夷へくだり、秋には西の馬関（下関）、兵庫（神戸）、大坂などへのぼる。航海は一年に一往復がふつうで、船はたいがい千石船という大型のものをを使う。形は平底の木造で、大きな一枚帆とへさきに小さな弥帆をもつ、そのころの日本ではどこでも見られた帆かけ船だが、独特なのは商いのやり方だった。

いっぱんの商い船は、回船といって運賃稼ぎを目的に、たのまれた品物を運ぶのがおもな仕事だ。しかしバイ船は、いわば船そのものが一軒の動く店となって、これぞと思う品物を買ひ積み、好きな地方へ運んで売る。だから船頭は、船や水主たちの指揮ばかりでなく番頭の役目もしなければならず、そのため船主自身が乗っていくこともめずらしくない。こうしたやり方のおかげでバイ船は、ねらいさえ当たればたいへんな利益をあげることができたから、一攫千金の野心をも





つものにはこのうえなく魅力のある商売とされている。

茂助は、海と白帆に目を遊ばせながら、今しがた大野川の向こうにながめてきたばかりの、屋敷のことを思い出した。

大野川は、金沢平野にある湖水、河北潟から日本海へゆるやかに流れている。上流、潟に近い北の岸、粟ヶ崎には古くからの大地主木谷家、その先、向粟ヶ崎には島崎家があるが、両家ともとは、大がかりなバイ船商売で莫大な富を築いた海の豪商だった。なかでも茂助の憧れは、加賀きつての名家、木谷家だ。主人は代代藤右衛門をなおり、藩の御用商人もつとめる。ことに五代目の当主は、藩から十村（大庄屋）格の地位と侍なみに八十石の扶持をうけ、このあたりでは殿様のような威勢を誇っているのだ。

茂助も、村の道や官腰をいくその人に何度かであったことがある。たいていは馬に乗り、刀をさして、ひとりかふたり供をしたがえていたが、その姿は、肩で風をきって歩く侍たちより、よほど堂どうと見えた。

また、立派なのが屋敷だ。一丁（約百十メートル）四方ほどもある、高く真白な堀。内側には青あおと繁る、枝ぶりもみごとに大松の群れ。その間に、いぶし銀色にそびえるいく棟ものいらか。

茂助はのぞいたこともないが、門をくぐれば屋敷の玄関も、藩の重臣用とかふつうの侍用、百

姓や町人用といくつにもわかれていたそう。

木谷様には、日本じゅうの珍しい物がいろいろあるだろうな。茂助は潮風になぶられながら、とりとめもなく考えつづけた。いや、だれも見たいこともないような、海の向こうの、異国の物もきつとあるにちがいない。あの沖をいく、パイ船で積んできた……。きらきらとまぶしいギヤマの器や飾りもの。不思議なかくくりじかけの道具類。異国の人間や景色を描いた絵や書物。金や銀でできたふうがわりな家具、調度……。

こんなふうには茂助は、幼いころから海や、沖を上下する船を見ては、さまざまな空想をするのが好きだった。それは、ひとつには銭屋が、つい去年まで小さいながら船持ちだったせいもある。父の五兵衛は、若いころから醤油醸造業をするかたわら、米の運送を中心に回船業をやっていた。安永二年（一七七三）、父が三十一歳のとき生まれた茂助は、小さいころ家はかなり繁昌していたのを覚えていた。

しかし、千石船を何十艘も動かす本格的な大商人に、銭屋ていどの中途半端な船持ちがまともに立ち向かえるはずがない。商売がだんだんいきづまったところへ、三年前の天明三年（一七八三）から奥州を中心に大飢饉がはじまった。ことに津軽や南部地方の凶作はすさまじいほどで、何十万もの人が飢え死にした。米どころといわれるこの加賀でも不作がつづき、銭屋の船は運ぶ米もなくなつて、とうとう去年、最後の船を手放してしまった。かわりにはじめたのが、今の質

屋だ。かつては十人以上もいた雇人も、今では年よりの蔵男と中年の番頭のただふたりにへり、十五歳の茂助もたいせつな働き手になっている。

船のあったころはほんとうに楽しかった、と茂助は思う。錢屋の船はバイ船ではなかったけれど、それでもいろいろな夢をふくらませることができた。日本一にぎやかな町という大坂へいく。アイヌと呼ばれる人びとの住む、蝦夷へいく。それどころかあの水平線の向こう、日の沈む土地、だれもいったこととさえない国へ渡ることまでできる。

しかし、現実にはそれは、不可能なことだった。茂助の時代から百五十年ほど前、徳川幕府は日本を鎖国したが、その方針のひとつとして寛永十三年（一六三六）、日本人の海外渡航と在外邦人の帰国を厳重に禁じていたのである。

だが、だれも人の心までしることはできない。

この世界とは、どれだけの広さがあるのだろうか。どんな人間の住む国があるのだろうか。いつか父が金沢から買ってきた『画本万国誌』という本には、奇妙な国ぐにのことが書いてあった。

世界のはてには、頭がひとつで体をみつもった人間とか、胸にあながあいていたり、翼が生えていたり、体が魚になった人間の住む国があるそうだと。とても本当とは思えない気がするけれど、世界が球なら裏側にでもあるのだろうか。いつか自分の船をもち、捜しにいつてみたいものだ。

白く光る空に、それよりも白い帆を満まんと張って、幻の巨船が浮かぶ。この何年もの間に、もう何百回になるだろうか。空想するたびにその船はすっかり形を整え、今ではどんな細かなところでもはつきり心に描くことができる。

鋭くとがったへさきから優雅にはねあがったとも、まで、全長はおよそ二十間(約三十七メートル)、二千石(約二百容積トン)はゆうにこえるだろう。船は、最高の檣づくりだ。中央には、さし渡し三尺(約九十センチ強)余の帆柱がそびえたち、大きくふくらんだ帆にくつきり描かれている銭屋の紋「鵜眼銭印」(丸の中心に四角をはめこんだ紋)。帆柱の先端には、朱の房がひるがえる。帆柱の前、胴の間には、積み荷を雨としぶきから守るためにつくられた、小山ほどの葦屋根。そのうしろ、入り口にたてられた油障子の奥にある船室のヤカタ。なかの広さは二十畳敷きをこえ、まるで一軒の屋敷のよう。

へさきには、並みの船の主帆ほどもある弥帆が風をはらみ、その先、ミヨシの突端にはしゅろの皮をたばねてさげた巨大なサガリがゆれる。ともに、青空よりも濃い紺地に「朝日丸」と染めぬいたノボリ旗がはためく。

へさきのすぐうしろから胴の間の半ばまで、また胴の間の端からとも近くまで、両方の船端にめぐらされた波よけの垣立。その黒と白木のだんだら模様。ことにとももの垣立の中ほどにある横

の出入口、カイノ口のふちは太い。へさきの両側に置いた十挺の真黒な錨。波切りと、船底いちめんに塗った黒漆。横腹には、船をつらぬいて渡されたカンヌキやフナバリ、コシアテなど横材の頭が点々とならび、それらとミヨシ、ともの船ばたにはとくにほどこした朱漆。とりどりの色模様が、淡黄の檣の地肌にあざやかに映える。

船をつつんでさんさんと降りそそぐ黄金色の陽光。潮風に帆綱が鳴り、帆桁がきしむ。

ヤカタの油障子を開けて、今しもゆつたりと姿を現わしたのは、未来の茂助だ。この巨船の持ち主にふさわしく、筒袖に長い裾の、ぜいたくな航海着をまとっている。その裾をひらひらさせながら、茂助は悠然とともへ歩を運ぶ。そこには、長い楫の柄をにぎった水主がふたり。深ぶかと頭をさげる彼らに、茂助はおうような会釈を返しながら、目をへさきの向こうへあげる。

船は今、はるばるやってきた異国の港へはいるところだ。金色銀色にきらめきながら波がよせるところ、渚には、このみごとな船を迎えようと群衆がひしめき、そのうしろには異国の町や村や山やまがはるかにひろがる。

めくるめく思いで、茂助はひたいに手をあてて目をこらす。だが、群衆も風景も、それだけはいつも虹色の霧か霞に似たものがいちめんにかかり、あるいは息づくようにたおやかな曲線を描いてゆれ動き、どうしてもはつきりしないのだ。ただそこから微風に送られてくる匂いは、不思議ななまめかしさに満ちていて、鼻孔を妖しくすぐりたてる。すると茂助の胸はじんじんしび

れ、全身は甘い、そのくせ奇妙に苛だたいしい期待にぞくぞくおののきはじめるのだ。そうしてその感動は、幻の船に乗るごとに強くなり、心をゆすりたててくるのだった。

茂助が叫び出したような衝動に、両の手のひらをにぎりあわせたとき、ふいに、

「あんさん！」

「あんちゃんようっ！」

聞きなれた声が夢想を破った。

「どこにおるんやあ……！ あんさん！」

弟の六郎右衛門だ。

「茂助あんちゃん！」

下の弟の、又五郎も呼んでいる。

われに返った茂助は、立ちあがると二歩三步、砂丘へかけのぼった。

すぐ先に、大きな一本松がある。潮風にねじくれ砂にはった太い枝のかけから、十歳の六郎右衛門と六歳の又五郎が、前髪をなびかせて走ってくる。体を低くした茂助は、砂丘のすそをまわってふたりの背後に出ると、いきなり「わっ」とおどかした。いつもなら、それをきっかけに追っかけっこがはじまる。だがきょうは、すこしうすがちがっている。

「あ、やっぱりここやった……」